

# 日本生物學會誌

第 8 号



日本生物學會

1980年 2月20日

第 8 号

も く じ

奥野良之助：日本生態学会主催シンポジウム「自然と人類文明の共存 は可能か」 傍聴記 .....	249
ミス・コメント：居候ネコの話<<ネコとして自覚し自信を持っている一代目と、 人間もネコだと思っているのかネコの自覚に欠ける二代目ネコの比較>> .....	254
チーフテン MK1：人間の魔性(2) .....	258
奥野良之助：環境庁・公害研究所 見学記 .....	262
奥野良之助：魚 陸に 上る(5) .....	267
広 告：甘夏カンを食べませんか .....	273
編集局だより .....	284

日本生態学会主催シンポジウム  
「自然と人類文明の共存は可能か」  
傍 聴 記

奥野良之助

昨年（1979年）の1月ごろ、「日本生態学会大会プログラム」なるものがまいこんできた。老婆心ながら注意しておくが、「日本生物学会大会」ではない。考えてみれば当然のことで、ときどき会費を滞納して、そういえばいまも会費の督促状がきていたっけ、クビになりかけるが、私はいまでも、辛くも生態学会会員にとどまっている。この学会は、私が学生のころ創立され、創立大会では夜行の普通列車に立ちづめで東京へ行って大会の間中寝ていたし、京都で行なわれた第2回大会には、主催者側として進行係 — 時間がくるとベルをチーンと鳴らして、講演者をあわてさせる役。これは大変面白かった — をつとめ、仙台の第3回大会では、修士論文をひっさけて講演し12分の予定が7分で終わってしまって、座長と共に時間をもてあました、といった、さまざまな思出のある学会である。

しかしその後、いろいろなことがあってさまざまに考えがかわり、かつてあれほど興味があったのに、さっぱり興味がなくなってしまって、めったに参加しなくなった。とくにヒキガエルの調査をはじめてからは、年1回のヒキガエルの産卵と、年1回の大会とが、3月おわりから4月はじめにかけてちょうどぶつかるので、毎年悩み抜き、研究をとるべきか、勉強をとるべきか、大学教官としての正しい態度はどちらだろうか、などと困り果てた、といってもおそろくだれも信用するまい。私も信じていない。まあ、研究の鬼の私のことだから、毎年ヒキガエルの方をとっているので、学会へは行けないのである。

ところが、今度きたプログラムをながめているうちに、珍しく「これはひとつ、行かざるまい」と思いはじめた。次のようなシンポジウムが計画されていたからである。

「自然と人類文明の共存は可能か — その生態学的考察」

かの有名な北沢右三先生（東京都立大学教授）であるとか、宮崎昭 大先生（横浜国立大学助教授）であるとか、生態学界を代表するそうそうたるメンバーがずらりと並んで、「滅びゆく水辺」とか「内湾の運命」、あるいは「大型ほ乳類と人類の共存」といった、人を魅きつけてやまない魅力的な演題をかかっているではないか。

もともと生態学は、いまから10年前の1970年、公害がいっせいに問題化したとき、「公害」は我々の担当分野であり、「生態学のみが公害から人類を救う」と名乗りを挙げて、あまり中味のない話を、さも中味ありけに言いふらした学問である。中味のないことがばれたのか、それとも社会の方があまり必要を感じなくなったのか、最近ではほとんど鳴りをひそめて、私などはほっとしていたところなのだが、どうもそうではなかったらしい。それにしても、「自然と人類文明の共存は可能か」とは大きく出たものである。「可能か」という問いかけは、「不可能である」という答が予測されている場合によく使われる。「可能だろう」と思うときには逆に、「不可能か」と問題を提起するのである。どうやら生態学者は、「共存は不可能だ」と思っているらしい。そうになると、少々大変である。何となれば、生態学者は人類より自然の方をより愛しているらしいから、「人類文明に死んでもらいましょ」などという正しい答を出すかも知れぬ。自然よりも文明の方が好きな私は、またもっともらしい理屈をつけて反論しなければならなくなる。それなら、そんな牙は早いうちにつんでおく方が、お互いに楽ではないか。

こうして私は、会場の横浜へ出発することにした。そして、このシンポジウムに出席した。ところが、意外や意外、まったくしまらない終り方をしてしまって、一言を言うことすらできなかったのである。それは後にのべることにして、まず各講演者の言い分を紹介していくことにしよう。

## 1. 「はじめに」北沢右三（都立大・理学部・生物学科）

北沢先生はこのシンポジウムの主催者の一人であり、これが計画され、準備されたいきさつを語られた。それによると、準備委員会で、どんなテーマでシンポジウムをするかということ公裏したところ、「自然 — 人類 — 生態学者のあり方」というテーマが、たったひとつだけ来たそうである。そこで、このテーマをとりあけることにしたのだが、少しやわらかく(?)して、「自然と人類文明の共存は可能か」にしたのだという。“やわらかくした”というのはもうひとつよくわからぬが、「生態学者のあり方」などという、かたい（あるいはきびしい）のかもしれない。

「生態学的考察」なら科学的・客観的で、生態学“者”が表面に出なくともよくなるからだろう。それはともかく、できるだけたくさんエキスパート（自然と文明の共存についての“エキスパート”などいるのだろうか？）に話してもらって、総合討論をやりたい。結論の出せるような問題でもないし、出そうとも思っていないので（無責任!!）自由に発言してもらいたい、というのが、司会者北沢氏のあいさつであった。

## 2. 「植生と人間」宮崎昭（横浜国立大学・環境研究所）

宮崎 昭 大先生の「植生と人間」といえば、もはや説明は不要であろう。「人類」は「森林」を痛めつけてきた。その「むくい」がいまやきつつある。森林を復活せよ！それ以外に「人類」の生き残る道はない！！ (スライド沢山パチパチ)

### 3. 「減ひゆく水辺」 沖野 外 輝 夫 (信州大・すわ臨湖実験所)

すわ湖が次第に汚染され、水草帯がへってきた、というお話である。これはいけない、というわけで、下水処理場をつくったのだが、そのためにまた水草帯を埋め立てたので、さらに減ってしまったそうである。水草がなくなったらどうなるか。それがわからない。ワカサギは減っていない。沿岸にすむヨシノホリとフナは少し減った。(大したこと、おまへんやないか)

水辺が減っていく、その原因をつきとめ、ふせぐのが生態学の役目である。(汚水を流しこんだり、埋め立てたりするのが、その原因と違うのですかネ)

### 4. 「大型ほ乳類と人類の共存」 丸 山 直 樹 (東京農工大・農学部)

人類というレベルで一度もものを考えたことがなかったので(大変健全!)、講演をたのまれて非常に憂うつになった。(大変正産!) この2つの共存はむずかしい。なぜ、むずかしいか。大型ほ乳類側の問題点として、あまり急速に増えない、人間に害を与えるものがある、行動半径が広い、(こんなの、ほ乳類側の問題点と言うんですかねえ) などがあり、人類側の問題点として資源となっている、人間は開発しないと生きられん、(それはそうだけど、そういってしまえば話はおわりになるのでは?) 人間の方に共存しようという意欲がない、(といわれても、クマとの「共存」は、やはりご免こうむりたいですね)・大型ほ乳類の自然における役割を理解していない等々。(どんな「役割」が知らないけど、「理解」してもクマと共存する意欲はわいてきそうにない) そこでどうするか。もっとよく調べて、科学的な総合対策を立てなければならぬ。(立つはずがないじゃないか、いくら調べたって) ところが大型ほ乳類の調査には金がかかる。といっても、自衛隊の対潜しよう戒厳1機分でもまわしてもらえれば、できるのだが。(対潜しよう戒厳をまわしてもらうことには賛成するが、まわす先はもうちょっとましなところにしてほしい)

### 5. 「鳥の人生」 浦本昌紀 (和光大・生物)

「共存は可能か」などといわれても、何を考えたらいいかよくわからない。第一、「自然」も「人類」も、それぞれがよくわからぬから、ましてその「共存」などわかるはずはない。「自然と共存したい」ということならよくわかる。「共存は可能か」といわれたら困ってしまう。(このあたり、みなさんよく判りますか?)。鳥は種(しゅ)ごとに違うすみ場所にすむ。技術的問題として、この鳥を残せ、といわれたら、その種の環境をすべて残す以外にやり方はない。それが残せなければ、その種は減るだけである。ドバトやカラスなどは、少々環境が変化しても、あつかましく生き残る。残した方がいいのかどうかになるとわからない。わからないものは、とりあえず残しておけ、というのは1つの見識ではある。人類文明の方も、いろいろに考えられる。しかし、文明

をかえるのは、生態学の役割ではない。生態学者の集まりでしゃべる必要はなかろう。(生態学者の中にも、たまにはこんな面白い人もいる、ということである)

#### 6 「生態学者と微生物」 手塚泰彦 (都立大・理学部・生物)

これは、自然をいかに管理するか、という問題である。(まだこんな恐い人がいた!) ところが、自然=生態系のしくみが、まだぼろきりわかっていない。(ああ、よかった、まだ管理されずにすみそうだ) そのどこがわからないのか。“微生物”の部分である。ここでこんなことをいうのは少々我田引水のきらいはあるが、(いえいえ、決して“少々”ではないでしょう) 植物・動物の生態研究者にくらべて、生態系の三大要素(生産者=植物・消費者=動物・分解者=微生物)の1つである微生物の研究者が少なすぎるからである。これをもっと増やさなければ、いつまでたっても自然=生態系は理解できないであろう! (増員反対!!)

#### 7. 「内湾の運命」 堀越増興 (東大・海洋研)

東京湾の羽田沖に無生物帯があった。ヘドロがたまり、酸素がなくなったためである。しかし1971年ごろから回復ははじめ、クルマエビやシャコもとれ出した。規制によって内湾の生物は回復する。ただし、無機物の規制ほどのくらいやってるのか、よくわからない。(水銀入りのエビがとれるより、何もとれない方が、「人類の運命」にとってはまだましだ、と思うのですが)

#### 8 都市沼田真 (千葉大・理学部・生物)

人類の6~7割は都市にすむ。(のっけからウソである。先進国だけならそうかも知れんが) だから、都市における「自然と人類文明の共存」をこそ、考えなければならない。(田舎の切り捨て!) 自然がどうかかわっていくか? 人工化された自然が、いかに人間に影響を与えるか? 人間がどうかかわっていくか? (汚染に適応したものだけが生き残り、ゴキブリなどが可愛く見えてくる!) これらが都市生態学に課せられた課題(そんなの“課した”憶えはない)であるが、結論は出ていない。(ああよかった) 都市計画に対して、こうしなさい、とは言えない。

#### 9. 「住民運動と生態学」 小川潔 (東大・理学部・生物・学生)

現地での個別的な問題を、学問的一般理論で割り切るのは無理である。一方、住民運動にも非科学的なところをもたしかにある。だからといって、研究者がそれを切り捨てないで、いろいろと教えてほしい。(あんまり教えてもらわん方がいいと思うよ) 研究者は第3者的である。運動に参加すると責任が生じて逃げられなくなる。(逃げられなくなるようでは、まだ一人前の研究者とはいえないよ) もっととりこんでほしい。

さて、以上で各演者の講演はみんなすんだ。学会やシンポジウムの恒例により、各演者とも時間をオーバーして、それぞれの講演についての質問は1つ2つ、それもおおむね、聞いても聞か

くとも大勢に影響ないようなものばかりで、みんなの熱い期待は、さいこの総合討論に集まった。それがいまや開始されんとしている。司会者北沢先生が登壇した。

「さて、ここで総合討論にはいるのですが、どうも、このシンポジウムを計画した人は、総合討論に重点をおいていなかったものとみえまして、実をいいますと、懇親会場へいくバスがもうついていて、待っているんだそうです。あんまり待たすのも悪いから、あとせいぜい15分くらい、しめくりを宮崎先生にお願いしてあるので、まあ10分、討論したいと思います。総合討論をしないとシンポジウムになりませんからね。」

これではまるで詐欺のようなものである。つまらないやりとりがほんの少々続いてお開きとなり、我らが生態学者の大半は、お迎えバスに分乗して、懇親会場の中華料理店へと去った。一杯のみながら、「いやほんとに、微生物をやる生態学者が少なくてお困りでしょう」とか「ヘリコプターがなければ大型は乳類の研究はできない」とか何とか、気炎をあげられたことであろう。私はそんなところへ行かなかったから知らないが。

「公害から人類を救う唯一の学」として、派手に名乗りを挙げた生態学者の、これがシンポジウムの実態である。少くらはは恥しいと思わないのだろうか。要するに、公害を解決する能力など、生態学者にはなかったことを、生態学者自身が見事に証明してしまったということである。でもかれらは、能力がないとは言わない。金がない、と言うのである。学者なるものを、夢信用してはいけない。私も学者だから、私の言うことも信用してはいけない。

もっとも、このシンポジウムの唯一の収穫は、総合討論がなく、したがって結論が出なかったことであった。だって、「共存は不可能である。だから人類文明に死んでいただきますよ」などという結論が出たら、困ってしまうではありませんか！

## 居候・ネコのはなし

<<ネコとして自覚し自信を持っている一代目と、

41

人間もネコだと思っているのかネコの自覚に欠ける二代目ネコの比較>>

### ミス・コメント

そもそも、私と社長だけの小さな事務所でネコを飼うことになったのは、11月の少し寒い夕方に、黒っぽいネコが事務所の冷蔵庫の前に、ちょこんと座っていた事から始まった。どこから来たのか、いっとうして部屋に入って来たのかも分らないけれど、ネコの方からやって来たのである。人見知りする事もなく、事務所の人間2人に懐いて、ネコを今までに飼ったことがなく、ネコより犬の方が好きだと言っていた私を、犬のネコ好きにってしまった。

彼の仕草のひとつひとつが、とてもおもしろく可愛いし、遊んでやると、いくらでも人間を羨まさせてくれる。寝ていてもいろんなポーズをするので、これまた私たちを笑わせてくれる。それに、教えなくても初めからトイレ（もちろんネコ用の）を使うし、自分で体中をなめてきれいにする。犬のように毛は汚っぽくないし、お腹も毛でふさふさしているので手触りがとてもよい。そして彼は自分をネコだと自覚して、人間なんかに指図されるものかと言わんばかりに、反対に人間に指図する。つまり、適当にゴマをすり、愛きょうをふりまき彼の思いどおりに私をあやつるのである。私が彼の希望どおりの事をしてやらない時は、もうそれ以上こびる事なく、ふてくされて知らん顔で、人間なんかあてにするものかといった感じで彼はネコとしての自信にあふれていた。だから、私は彼の生き方を尊重して、いわゆる「ネコの飼い方」等の本は読む気も起こらず、ペットというより人間とネコの対等な関係を好んだ。

彼の名は「ミーコ」、事務所の居候ネコ一代目である。来た時は、生後1年目ぐらいだった。初めのころは部屋の中で、よく遊び、よく食べ、よく寝た。少しは外へ出してやろうと思ったが、私としては、外は車が引切り無しに走っているので交通事故が心配だった。外に出すのも恐る恐る、少しづつ外出させたが、それは人間の判断で、彼はれっきとした都会ネコ。止まっている車は、草とか木々のない街での絶好の隠れみの、走ってくる車は、早くからレーダーでキャッチして素早く逃げる。だから、私は安心して、自由に外出させる事にした。そのうち、ミーコの外出時間は段々長くなり、

事務所に帰ってくるのは、食事と睡眠の時だけになり、雨が降ろうと、おかまいなしに大きな声をはりあげ、彼女とのデートに勇んで出てゆく。時には外泊もするようになり、1晩泊りは序の口で、3・4日も帰らない事もあった。私は心配して、毎晩、彼を捜して必死にあちこち歩きまわるハメになる。ところが、世渡りの上手なミーコは、道を歩く人にも愛きょうをふりまき、どこの家でも行きたい所へ入りこんでしまう。そしてお腹が空くか、眠くなると帰ってくるのである。

ところが、春が過ぎ夏が来るころに、またいつもの外泊だと思っていたら、何日待っても帰って来ない。かなり遠くまで、思いあたる所をすべて捜しても、どこにもいない。私は1カ月たっても2カ月たっても帰って来るかも知れないという期待を捨て切れなかったが、現に帰って来ないのだから家出をした事を認めざるをえなかった。

事務所は再び、人間だけになった。さびしい反面、私たち人間に自由がもどってきた。ネコの為に休日を返上して事務所に出向かなくても良いし、夕方に外出すれば、そのまま自宅へ帰る事だって出来るのである。それから暫くは、さびしさに堪えて、解放感を満喫するというおかしな感じて仕事に励んで(?)いたが、半年ほどした時、再び事務所にネコがやって来た。まだ片手に乗るくらいの小っちゃな捨てネコで、だれも引き取らないので、社長が事務所に連れて来たのである。

その子ネコの目は、目ヤニで開かないし、体中ノミだらけの、ゴミだらけでカゴに入っていた。私は、たちまちネコがやって来た喜びにあふれて、さっそく、彼女の目ヤニを取り、せっせと彼女に尽してしまう。彼女の名付けは、一変二変して「ペッパー」に落ち着いた。

一代目ミーコの時は、青ネコ書など否定したけれど、目ヤニの子ネコがクシャミをして、青鼻を出す、やはり本に頼る他はなく、真険に何度も読んで、忠実に実行した。食事はカレイやヒラメなど白身の魚が良いとある。ノミの取り方は3・4通りあるが、すきぐじが一番うまく行った。少しずつ目ヤニもなくなり、ノミも少なくなって見易い容姿になってきたら、次は回虫退治と、とにかく手間のかかる子である。食餌は一代目のようにキャットフーズとイリコの出がらしてはダメらしい。彼女は食べるのだけれど、すぐ下痢をするので、魚を煮てやらなければならない。夜は、子ネコだし寒いとかわいそうだと思い、湯タンポをしてやる。毎日その用意に1時間半。そして週に1・2回は魚の買い出し。私はたいてい外食だから、魚屋にはめったに行った事がないのに、今ではどこの店が安いかもは握して、夕方の値引きしてくれるところに出かける。

食事と寝床の用意、トイレの砂掃除は、ともかくとして、戦争はこれからである。彼女を遊んでやらないと、私は仕事をする事が出来ないのだ。なにしろ生後2・3カ月の子ネコの時にこの事務所に来て以来、彼女は他のネコに合った事がないのである。遊び相手は私たち人間だと思っているらしい。おもちゃを与えて少しの間だと、ひとり(一匹)で遊んでいるが、やはり物足りないらしく、私の前に来て、ちょこんと座る。ひとたび彼女と目と目が合うと、私の手をめがけてツメを立ててくる。こちらが怒ると彼女も耳を立てて、より強くツメを立て、かみついてくる。しかたなくトレーニングペーパーをクシャクシャと丸めて投げてやると、犬のように彼女はそれを追っかけて、私の所へ

くわえて持ってくる。その時の彼女の表情は、先きほどとはガラリと変わって、まじめそのもので、目付きも真険だし、時々には瞬きをしながら、スタスタと歩いてくるのである。彼女は、まるで唯一の仕事を与えられたような満足感にあふれている。

ペッパーは、ハエを取るにも、高い所へ上るにも人間をあてにする。ハエを見付けると異様な鳴き声を上げ興奮して追っかけるけれど、ハエには手が届かない。そのうちにハエは、もう他へ飛んで行って、彼女は見失ってしまう。ペッパーはハエが取れない焦ったさで、また必死になる。ある時彼女を持ち上げてハエに届くようにしてやった（ネコの狩りを手伝う人間も変っているけれど）が、彼女は要領が悪い。ハエの近くにもう一つ黒いものが現われたのである。2匹もいたかしらと思うと、それはクモだった。クモは、ひょいと1本の糸で体をつないで少し降りて来たかと思うとハエをつかまえて、そのままケイ光燈の裏に入ってしまった。ペッパーはそれでもまだ、むきになっている。なんともおそまつな話だ。一代目ミーコだと、黙って息をこらえ、じっと構えて、チャンスを待ち、私の目にもつかまえたかどうか分からないぐらいの早技でちゃんとハエを取り、ペロリと食べてしまうのにと思い出すと、どう考えてもペッパーの狩りの方法はネコ技とは思えない。

でも、彼女は人間の身体を利用する方法は素早い。高い所へ上がりたい時など、その側を人が歩くと、すぐさまその人の身体を駆け上り、ボンと彼女の希望の場所に乗るのである。それも、彼女は必ず後ろからやって来るので、ちょっと油断をすると、思いっきりツメを立てて登られてしまう。私たちは服の上からでも彼女の鋭いツメが入りこんで、肩も背中も、体中がツメ跡だらけになる。

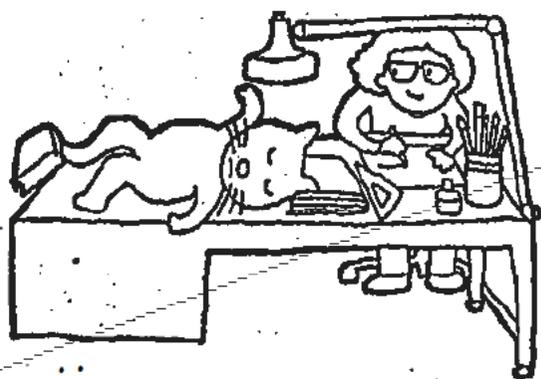
私が仕事を始めようとする、机の上にあがって私の前に座る。降ろそうすると彼女はツメと歯で攻撃してくる。追っばらなくてもすぐ飛び乗って机を占領する。忙しい時には彼女と遊んでいる訳にはいかない。人間側の武器はタバコの煙のみ。さっそくタバコをすって煙にまいてやる。しかし、いつもブカブカ煙をふかしてる訳にもいかず、結局は机の片隅を譲っていただいて、とにかく仕事を進めるといふ具合である。

私がお菓子でも食べようと、袋を開ける音がすると、すぐさま彼女はやってくる。何んでも人間が食べるものは彼女も食べられると思っているのか、リンゴでも私が食べると欲しそうに手を伸ばす。でもおさらに入れてあるのは臭をかぐだけで知らん顔である。

小包とか何か新しい物が配達されると、まず彼女が駆けつけていき、臭をかいて点検する。事務所のあるなら、すべて彼女は知っているのである。事務所と宗知の場所は、引き出しの中とロッカーの中で、引き出しを開め忘れると、必ず彼女はその中に入りこんでガサガサやっている。

しかし、彼女もこのごろは外に出たくなっただけで、ところが、抱いて少し遠くまで連れて行くと、私にしがみついてきてブルブル震えるし、降ろしてやると、道路にお腹をくっつけて、何とも不格好な姿勢ではっている。だから目下のところ、彼女の散歩は事務所のドアから3～5メートル以内である。日に何度か、彼女の精一杯の範囲で散歩して、往勢な好奇心を少し満足させている。

生物学会誌だからと思って、サブタイトルに、ネコとしその自覚ウンヌンと付けてみたものの、  
こうして書いてみるとそれに反して私が、人間と自覚していないような不安に襲われそうになってきた。  
私は事務所に仕事をしに行っているのが、子ネコに雇われているのか分らなくなる。私が主人だと日  
本語で言ってみても彼女には通じない。何だか彼女がうらやましくなってくるが、ここでくじけては  
ますます不利になる。なんとか、私が人間だと言う事を見せ付けてやりたいが、今のところ、彼女を  
追い出す以外には良い作戦が思い浮かばないので、当分はこの状態が続きそうだ。



## 人 間 の 魔 性 (2)

### チーフテンMK1

またまた教授のやつには頭にくる。この社会の大学体制によれば、仕事は教授から教制的にやらされることになっている。その強制的にやらされるという意味は、次のようである。教授がやっている研究の一部、あるいは全部を教授のかわりにやらされるということであり、自分で研究課題をえらぶことなどできないということである。教授にしたがっていかなくてはならないということである。強制収容所の中で強制労働させられるのと同じ意味がそこにある。黄金という“鉄の鎖”と“むち”で上部構造のために働かされるのである。そして利益はすべて教授がとってってしまうのである。実験結果はすべて教授の所有物となる。教授はこのようなことは当然のこと、正しいことと考えているようだ。だから、教授によって支配されているものも、教授によって支配されることを、よろこんでいると教授は考えている。もちろん、教授によって支配されるのをよろこんでいる助手や講師などがあることはたしかであるが、そうでないものもあるのだ。今回は、このことについて考えてみました。それで、一つの例をあけて考えてみます。

教授によって強制された仕事に、科学研究費が与えられることになった。その科研費のことでおもしろいことがおこったのです。私とその科研費について教授に何もいわないで、科研費の使い道などを決定し、事務的な手続きをしてしまった。科研費が与えられたことについて、教授に何か言わなければならないことなど、私は全く知らなかったのだ。また、何かを言う必要があるとも思わなかった。社会的な常識によれば、教授に何か言わなければならないらしい、ということが後で人から聞いて、わかった。

そして、科研費が与えられることになって、1週間ぐらいたった後、教授が私をよびつけて、次のように言うのである。

「こんなことは言いたくはないが、君の将来のために言うのだ。科研費をもらったのなら、なぜ一言、ありがとうございますと言わないのか？ 君はこれからずっと研究をつづけていくのだから、そうしたほうがよい。君の研究テーマはほかの研究テーマだ。だからそうすべきだ」と。

あのくそ教授のやつ、よくもこんな“ぶたのたわごと”を言うものだ、と私は思った。なんて

ありがとうございました、などと言わなければならないのか、その理由がまったくわからない。以上が、私の最初の思いであった。瞬間的に、私はそう思ったのであるが、教授にむかって、まともにそうは言えない。だから書くことにした。

私がなぜ教授にありがとうございましたと言わなければならないのか。その理由はないと思うのです。なぜなら、教授によって、強制労働させられているから。私が自分で選んだ研究方向へむかおうとすると、教授は“やめろ”と言う。教授の研究方向でないと仕事をしてはならないのだ。たとえ、教授が我々に自由に研究課題を選ばせて、仕事をさせたとしても、利益はすべてとってってしまう。強制労働させられている仕事に科研費など与えられても、それがためになおさら仕事を強制されることになる。そんな科研費をもらって、なぜありがとうございましたといわなければならないのか。それに「教授の研究テーマだ」というのなら、そんなに大切な研究テーマを人にやらせる方がおかしい。教授はてめい一人でその研究テーマをやればいいのだ。あのくそ教授はてめいの研究テーマを人に強制させることで、人がよるこぶとでも思っているらしい。あの教授は人間の顔をした化け物にちがいない。あんなものは死んでしまえ。教授が私に「ありがとう」と言えという意味は金をもらってありがとうと言えということのほかにも、教授のあほみたいな研究テーマをやらせてもらったので、金があつたのだから、教授のテーマをやらされていることに感謝せよという意味である。教授はよく「楽しくみんなで仕事をしましょう」と言う。それは「我々支配されるものが支配者から支配されるのを望んでいて、そうなることが我々にとって楽しいことである」と教授が考えている一つの証拠では。それこそ教授の独断でありすべてのことを自分かってに決定している教授にとって当然であるかもしれないが、それでは他人が迷惑する。支配者によって人が奴隷化されるのはだれでもいやなことである。しかし、そのようなことに気づかない幸福な人もいるが、みずから好んで教授に従っている人もいるわけだ。それを教授は知っていて、教授にしたがって下さいと言う

以前、教授に何かを言わなければならないと書きましたが、その意味するところは次のようなことだと思います。教授は他人（教室員）を強制労働させることなど当然のこととして考えており、人を奴隷として、自分の私物として支配することをめざしているのだ。そして、教授に従うことが我々にとって喜ばしいことであり、崇高な道徳であるわけだ。あのバカ教授どもは本当にこのような考え方をしているのだ。ではなぜ教授はそのような考え方をするのか。その原因を考えておかななくてはならないのではないかと。

考えられることは業績（研究結果＝自然法則）がすべてに優先するということだ。人間よりも。これは、一人や二人の教授や学者とよばれる人によって作られたものではないだろう。社会全体によってつくりあげられたものであろう。業績がすべてに優先するという価値が出来上がると、教授は業績を集めようと必死になる。教授にとってもっとも大切なものは業績であるからだ。業績は社

会的によりよい地位を得るための出世につながり、その中で教授は安定性をもとめる。教授の目的はそこらへんにあるわけだ（それは教授だけにかぎったことではないと思うが）。あとは地位を得るために手段を選ばず……である。そのために、教授に利用される我々が迷惑する。教授にとって業績は神様です。教授はいつもその神の前にはいつくばっているのです。教授と業績の関係はサルとタマネギの関係ににている。なぜなら、いつまでたっても皮だから。

業績の価値が人間より大切であるから、教授は業績によって支配されている。教授は業績の言うことなら、何でも聞くと言うことだ。人間によって見つけだされた知識によって人間が支配されるのである。本来は人間が知識を支配していかなくてはならないのに、逆転してしまっている。教授は自分の業績を得るために他人を利用し、奴隷にするが、教授も業績によって奴隷にされている。業績（＝出世）を求める欲望によって教授自身が操作されているからだ。それは研究すること自体、自然を解明しようとする事自体がおもしろいからではなく、出世が目的であるからだ。教授はよく「おもしろい実験結果だ、その実験はおもしろい」などというが、これはまったくのうそである。実際は、よりよい業績をあげることができるのでおもしろいと言うのである。自然を解明したからおもしろいというのではない。もしそうでないなら、他人の実験結果をとって、学会で発表したり（自分自身は実験しないで）、自分の研究課題を他人にやらせたりはしないだろう。

以上から考えて、科学研究とは人間という化け物を作り出すのではないだろうか、科学研究とは、自然を解明するとは何か？という疑問がおこる。

最後に、私が読んだたった1個の科学史の本「科学思想のあゆみ」の序論で、ちょっと気になる文章がありました。そのあたりの文章を引用しようと思います。

人間の魂には、魂自体も含むこの世界についての説明をなんとか求めたいという、消すことのできないやみがたい渴望がある。この永遠のあこがれの一つの表現が、宗教的な体験の定式化である。このような抱負に似たものが、歴史家にもある。かれもまた、宇宙の法則と秩序を求めている。歴史も、科学や宗教とおなじく、このような法則をたえず探究することであるが、このような法則は、つかまえようとする、いつもするりと逃げていく。そこで、もしも歴史家が後世から正当に判断されたいと思うならば、かれは、つぎの碑文をただ繰り返すほかはない。

通りすがりにこの碑を読む人よ、

あなたも、かつての私とおなじである。

そしていつかはあなたも、いまの私とおなじようになるだろう。

それゆえに、この碑を読む人よ、

私のために祈りをささげよ。

時は、たえずすぎゆく流れのように、そのすべての子らを連れ去る。われわれが研究しようとするものは、この流れそのものと、そこに住んでいる精神とである。（「科学思想のあゆみ」Ch. シンガー著、伊東俊太郎、木村陽二郎、平田 寛 訳、2 頁）

そのちょっと気になる文章とは「人間の魂には、魂自体も含むこの世界についての説明を何とか求めたいという消すことのできないやみがたい渴望がある」である。この文章はた　ある時代では正しいことかもしれないが、現在についていえば正しいことであるとはいえないのではないだろうか。別の何かが入ってきて混乱し、その文章の影ほうしがうすくなってきているように思う。人間が自然を研究する場合、その行為の根底にある人間の欲求が別のもの（出世欲など）にすりかわってきているように思うのです。もちろん現代の科学に問題があるのはこのようなことだけではないだろうが。

人間という生物は自分自身の知らないうちにある事柄を別の事柄にうまくすりかえる生物だ。ほんとうのことをおおい隠しておいて、見掛けをとりつくる。それは自分の利益を得るためにそうするのであり、その場合いつも他人を利用し、迷惑をかける。教授のくそやろうどもは常にそういう行為をやっている。

見学記

奥野良之助

ある日のこと、私に電話がかかってきた。出てみると、環境庁の公害研究所だという。「生態学入門」では、相当環境庁の悪口を書いた覚えがある。少々どきりとして、とりあえず丁寧に応対した。ところが話は、公害研でやっているセミナーへ講師として呼ぶから一席やってくれ、という依頼であった。暖冬異変のせいか、妙なことがおこるわい、と思いながら聞いていると、どうも先方の話し方も歯切れが悪い。「といっても、先生もお忙しいでしょうから、無理なお願いだとは思いますが…」と、そこのところをしきりに強調されるので、何だかこちらから断わらなければ悪いような気になってくる。もっとも、向こうがその気なら、こちらも断わるわけにはいかん。忙しい時間を何とでもやりくりして、期待に応えなければならん、というのかっこいいが、本当はヒマで困っていたところではあった。そこで、どうして私のようなものを呼ぶことになったのか、と聞いてみた。すると、「セミナーの講師は所員のアンケートで選ぶことになっているのですが、先生の票が一番多かったものですから。」

ははあ、読めた。生意気なことばかり書いているあの奥野という奴を一度呼びつけて、コテンパンに粉碎してやろう、というわけか。それなら余計なこと、売られたケンカは買わずばなるまい。

これは、私の妻以外は、だれ一人信じないのだが、本当を言うと、私は大変気が弱いのである。その上人見知りで、初めてのところではなかなかいつもの調子が出ない。意地をはって引き受けたものの、心は安らかではない。もし、すごい奴がいて、とっちめられたらどうしよう。

そこで、我が生物学会の会員で、過激派の学生から建設省の高官にいたるまで顔がきくという、大変不思議な人物に電話をかけてみた。「もしもし、つかぬことをおうかがいしますが、環境庁の公害研究所ってのは、どんなところですか」「ああ、公害研ですか、あそこには、実にさまざまな分野の専門家がいて、あらゆる研究をやっているところです。でもただ一つ、公害の研究だけはやってないそうですよ」

これ以上明確な答はない。私は安心して出かけることにした。

上野から常盤線で1時間、「荒川沖」という駅で降りると、車の迎えが来ていて、送ってくれる私には初めての経験だけれど、たしかになかなかいい気分、みんながえらくなりたがるのも無理は

ない。開発は進みつつあるが、あたりは見渡すかぎりの武蔵野が広がり、遠くに筑波山がそびえている。

「こんな不便なところでは、通勤に困るでしょう。みんなどうされているのですか」

「ほとんどみんな、車で通ってるようですね。今のところ、バスをないものですか」

さて、公害研究所に着いてみると、そこは、広大なしき地に立派な建物が並び、素晴らしい研究所であった。所員230名、うち研究者が170～180名に達するそうである。京都大学の数学科の出身で、東大の工学部長を勤めたことがあるという、副所長の近藤次郎氏は、ちょっとオールド・リベラリストといった感じの人であったが、「いや、もう、ここにはいろんな専門家の奴がいて、勝手なことばかり言うとして、面白いとこですわ。ワッハッハ」

セミナーが始まると、どこからともなく所員が集まってきた。せいぜい20人が30人、と聞いていたのに、部屋一杯になって、何でも50人を越したらしい。私も結構人気がある、などとにやにやしていたら、話に変な方にそれて行って、收拾がつかなくなった。

昨年（これを書いている時点からいうと一昨年）「生態学入門」を書いてから未だ1年、それ以上のことを勉強したわけでもなし、かといって反対のことをしゃべるわけにもゆかぬ。与えられたテーマは、「環境研究における生態学の役割」というのだが、私はもともと、公害の研究に生態学など役に立たぬ、という主義だから、「こんなに役に立ちます」というような話はできない。そこで、1970年に公害問題が表面化して以来、生態学（者）がいかに悪い役割を果たしてきたか、という話をした。

「第1の役割は、公害問題を環境問題と言いかえよう、と主張して、具体的な社会的事件である公害から目をそらさせ、地球的規模の環境汚染、たとえば大気中の炭酸ガス濃度の問題などに、すりかえてしまったことです。おかげで、公害庁として計画されたお役所は環境庁となり、水俣病はほっといて、アルプスのスーパー林道をつくるかつくらんか、てなことばかりやるようになった。しかしここへ来て初めて、私、知ったのですが、その環境庁に“公害”研究所があるんですね。これは大変良いことです。ここでは、“環境”でなく、“公害”の研究をやっていただいているものと、私は固く信じています」（笑声）

話は1時間で、そのあと討論となったが、あまり質問は出なかった。「今西金司とハイエクとの対談の本を読んで感激した。どう思うか」などと聞かれたが、私はその本を読んでないので答えようがない。「先生の話には、動物行動学や動物社会学の批判がないが、どうしてか」と、人をまるでかみつき専門の闘犬みたいに考えている質問もあった。もっとも、その質問に、「動物行動学者も少々怪しげだけれど、ワシが公害を解決してやる、などと公言していないからとり上げなかった。でも、ロレンツなんか、人間と動物とを一踏にして、妙なこと言ってるから、いずれ勉強して批判してみたいとは思ってる」などと答えているのだから、闘犬と見られてもしょうがないかも知れない。

ひとつ、面白い質問があった。

「先生は、大気の循環や物質循環などの研究は無意味だと言われるが、たとえば、そういうことを知らないから、自動車に乗って排棄ガスを出して、自分で自分を痛めているので、やはり研究してそういうことを明らかにしていくことは必要ではないか」

とたんに私は、迎いの自動車の中での対話を思い出した。

「人が自動車に乗るのは、そういうことを知らないからではないと思いますよ。もしそうなら、この公害研のみなさんが車で通っておられることを、どう理解したらいいのでしょうか。私も、このころ、バイクに乗って喜んでいますね」

近藤副所長の結びの言葉が良かった。

「実は、この研究所の名前を、公害研究所から環境研究所にかえようという話が出ているんです。でも、今日のお話を聞きまして、今度そういう話をする前に、ひとつ先生の本を読んで、勉強することにししょう」

ぜひそうしていただいで、名前をかえないようにしていただきたい。

もっども、我等の“公害”研究所は、果して公害の研究をしているのだろうか。現在していなくても（設立後まだ5年だから）、将来はできるようになるのだろうか。

セミナーが終ってから、30分ほどのかけ足だったが、所内をひと回りして諸設備を見せてもらった。その結果は、どうもここでは、公害の研究など、未来永こう、できそうにない、というものであった。ひとくちに言うと、設備が立派すぎるのである。

この研究所の設備の目玉は、各種のモデル実験設備である。たとえば、湖や池のモデルとして、直径3メートル、高さ数メートルの巨大な水槽が、5～6本も並んでいる部屋がある。この水槽には、30センチおきくらいに、のぞき窓と水のサンプルをとり出す管がつき、もちろん全体は、温度、光など、すべての条件をコンピューターでコントロールできるようになっている。あらゆる湖の条件がボタン一つで、とはいかず、やはり三つ四つは押さないとだめだろうけれど、とにかく再現できるのである。その一つをのぞいてみたら、5～6メートルもある水槽の底に、50～60センチほど、汚ない水がたまっていた。近くのかすみが浦のモデル実験だそうである。びわ湖は水深90メートルあるという。どうして再現するのだろうか。

土壌のモデル実験設備もあった。これまた同じくらいの大きさの筒で、今度は水かわりに、当然のことながら、土がつめてある。上から水が自動的に給水され、各深さからのサンプルが自動的にとり出される。コンピューターによるコントロールも同じである。ここでひとつ、こっているのは、筒の上部が屋上に出ていて、その上をさらに巨大な温室がおおっていることである。まだ植えてなかったが、いずれヤシの木でも植えるのだろうか。

少々恐しかったのは、ガス・チェンバー、つまり「ガス室」が、ずらりと並んでいたことであつた。さまざまな組成のガスを送りこみ、生物の反応を調べる装置で、私のがぞいたときには、ひよろひよろのトウモロコシが2本、植えられていた。いずれ、いろいろな動物が、汚染された空気を吸わされて、センソクが何かになるのだらうけれども、動物ではよく判らんから人間を入れてみたい、などという気だけは、起こさないでいただきたい。

こういう設備を見ると、私はいつも、自分が閉じこめられるのではないかと、恐怖を感じる。優秀な一流の生態学者というものは、他人を閉じこめてガスを送ってデータをとりたい、など考えるらしい。ここが分かれ目である。もっとも、私はこれでも、“生態学講座”の“助教”である。自分で、生態学者に向いていない、など言っていると、大学を追い出される。さしあたり、ジエンナーにならなくて、息子が娘でも閉じこめて、何か吸わせてみるか。というような空想を駆せているうちに、見学は終わってしまった。

総合解析部という、私にも判らぬが、当のその部にいる人も、何をしたら良いのか判らないで困っている、という部の、比較的えらい人と話をしたとき、その人は、「お役所では研究できませんよ」と強調された。そのこと自身は、確かに真理である。私の古くからのある友人は、常々、“民尊官卑”をととなえていて、研究は民間でなければできない、国立の大学や研究所で研究ができるか、とうそぶいていた。もっともその彼も、少々事情があつて、さる国立大学の先生になってしまったから、研究ができていないにちがいない。

総合解析部のえらい人の、お役所研究不可能論は、しかし、私の友人のとは少しちがっていた。

「国は、設備には確かに金をかけてくれます。でも旅費は年間、たった7〜8万しかないんですよ。」これでは学会へ一度行ったらしまいです。

私の旅費は4万円だから、国立大学よりは少しい。でも、何を研究しても良い大学とちがってここは“公害”研究所である。まじめに公害の研究にとりくむには、まず公害の現場へ行って、泊りこんで、身をもって感じることから始めねばなるまい。旅費7〜8万では辛かろう。私は大いに同情した。

「そうでしょう。7〜8万くらい、学会へ1〜2度行ったらなくなります。大体、200人近い研究者のいるこの公害研で、外国の学会へ行けるのは、年間何人くらいだと思いますか？ 1人か、せいぜい2人なんですよ」

私の同情は、どうものはずれだったようである。公害研の公害研究者には、このすぐれて具体的な、そして全くの社会的、人間的（非人間的と言うべきか）問題である「公害」を、研究し解決しようという気は、さらさらないらしい。研究し、実験し、データを出し、学会で報告し、論文をつくる。そちらの方にいきがいを感じているらしい。その気ならば、こんなめぐるまるところはない。みごと

な研究設備がずらりと並んで、実験を待っている。そんなところで研究に夢中にならない研究者など研究者とは言えない。公害の現場から隔離して、実験に夢中にさせて、出てきたデータを使うのは、環境庁と政府である。きっと、人は死んでいても、公害はない、というたことが証明されるのだろう。

公害研の所員の方々にお願いしておきたい。何百億もの設備投資をむだにしてもいいから、壮大な実験施設は遊ばせておいて、公害の現場を歩いてほしい。そこで問題を見つけ、公害そのものを研究してほしい。そうしなければ、公害をなくす途は見つからない。

帰りに、また車で送ってもらった。中年の、おだやかな人柄の運転手の人と、話をした。

「こんな便利の悪いところへ来さされて、東京が懐かしくないですか」

「いやいや、ここはいいところですよ。実は東京にすんでたとき、家内と子供が軽いセンソクになっていましたね。それが、ここへ住むようになってから、ピタリとなおったんですよ。おかげでみんな元気で、喜んでます」

「それでも、たまには東京へいきたくなるでしょう」

「いや、もうあんな公害の激しいところは、遊びに行くのもいやですね」

なるほど、これでは公害の研究は、できそうにない。「何でも研究しているが、公害の研究だけはしていない」という見解は、まことに正当であった。

## 魚 陸 に 上 る (5)

### — 魚 から 人 間 ま で の 歴 史 —

奥 野 良 之 助

#### 第一章 魚 の 起 原 (続)

##### 3. アリストテレスからダーウインまで (続)

ラ マ ル ク (1744-1829) : フランスはパリ、自然史博物館の美しい植物園に、かつてのフランスの偉大な、あるいは卑小な、学者の胸像がいくつも建てられている。その中にひとつかの有名な最初の進化論者、ジャン・バティスト・ピエール・アントウアン・ドモネ、つまりラマルクの胸像もある。そして、それに近づいて、その台にきざまれた文字を読むと、という風に書くと、いかにも私がかつてフランスを訪ずれ、フランス語をすらすら読めるように思われるだろうが、もちろんそんなことはない。海外へ行ったことはあるが、それは、淡路島と佐渡島と四国とあまみ大島だけである。九州も行ったが、あそこはトンネルで運っているから海外ではない。昨年北海道まで行った。これは今のところ、まだ海外である。ついでに断っておくが、やはり当会会員である私の娘から、いらぬことを書くな、と抗戦された。

「そんなこと言うたって、あれ、ほんとやる」「ほんとでも、あんなこと書かれたら、乙女心が傷つくやないの」「ところで、フランス語、ほんまに通ったんか」「こんどの試験で、2つは通りそうやけど、1つは危いねん」最近聞いたところでは、3つとも通ったそうである。

さて、話はラマルクの胸像に書いてある一文のことであった。そこには、ラマルクの娘、コルネイユさんの言葉として、「後世の人びとはあなたをたたえ、あなたのために復しゅうしてくれるでしょう、お父さん」と書いてある、厳密に言うと、そうである。

このコルネイユという娘さんは、キュウイエにいじめぬかれた父ラマルクに最後まで味方する非常に親しいの娘さんであった。ラマルクの主張する進化論をキュウイエは認めない。何しろ相手は絶大な権力を持っているから、だれもラマルクに味方しない。それでもラマルクは屈せず、晩年目が見えなくなって職を退いたのちも、本を書いてキュウイエと闘う。その口述筆記をしたのが、このコルネイユなのである。私はまだ若いころ、この話を読んで、大英に感激した。娘を持つとな

こういう娘を持ちたい、と思った。今は、そう思っていない。ところで、最近あることを発見して、私のコルネイユ熱もさめてしまった。ラマルクは大変長生きした人で、死んだのは85歳のときである。そのとき、我がコルネイユさんはいくつだったのだろうか。

さて、キュウイエとともに、ラマルクの評判は現代あまりよくない。それは、獲得形質の遺伝を主張したからであって、のちに、それは遺伝しないことが証明された。私が学生のころ、ソ連にルイセンコなる学者が現われて、獲得形質は遺伝する、しないという奴はブルジョワ学者だ、などと言い出したので、遂に資本主義体制対社会主義体制の大競争になった。そのころ、やはり獲得形質は遺伝するのじないか、など不用意に口走ったところ、さる遺伝学者に聞きとがめられ、数時間にわたって説教された覚えがある。獲得形質とは、生物が生まれてから、その努力によって獲得した性質のことで、たとえば、毎日走って強くなった足とか、毎日勉強して常識を失った脳とか、いったものである。

獲得形質が遺伝しないと、最初に言ったのは、ワイズマン教授であった。その名のとおり、彼は非常に賢い男で、大変単純な、したがってだれでも納得するような、1つの実験をやって証明した。彼は、実験室で飼っていたシロネズミ、クロネズミだったかもしれないけど、とにかくネズミの尻尾をハサミでチョキンと切り、子供を産ませて大きくして、またチョキン、まあブツリでもスカッとでもよいが、とにかく切り続けて50代、だったと思うがもっと多かったかも知れないが、それは何代でもよいので、要するに切り続けたのである。「その結果、ネズミの尻尾は1ミリといえども短くならなかった。したがって獲得形質は遺伝しない」と、彼は書いている、というように書ければカッコいいのだが、例によって原典など当たっていないので、そうは書けない。と言いつつ書いているのだから、大学教官はたくましい。

ルイセンコ学説が大いにもてはやされていたころ、「ワイズマンの実験は、徹頭徹尾間違っている。あんな実験では獲得形質の遺伝が否定されたことにはならない」と、勇ましく名乗りを挙げた日本の学者がいた。「第1、50代くらいでは、何百万年という進化の年代にくらべて、余りにも短かすぎる。それに、かのダーウインは、“生物は生活を通じて進化する”と言っているではないか。ハサミで尻尾をちょん切って、ネズミの生活と何のかかわりがあるろうか。だいたいワイズマンは機械論者の典型だ。だからハサミなどを使う。」

こうしてこの先生は、獲得形質は必ず遺伝するという確信の下に、壮大な実験を開始された。といっても、その原理は大変簡単で、ショウジョウバエを暗黒の中で、えんえんと飼いつづけようというのである。そのうち、目がなくなるだろう。

実験は、1年、2年、3年、と続けられ、代数も、100、200、300代と増えていった。果して目はなくなったのであろうか？あるいは少しづつでも小さくなっていったのであろうか？

この実験は最近まで、20年以上にもわたってつけられた。代数も数千、いや数万を越えたにちがいない。しかし、ショウジョウバエの目は、なくなるどころか、微動だもしなかったのであ

る。

これでは、獲得形質の遺伝を実証するどころか、ワイスマンの実験を拡大普延して、遺伝しないことを確証してしまったようなものである。もっとも、実はこの実験も、あまりショウジョウバエの生活とは関連していない。牛乳ビンの中には餌は十分にあり、異性にも不自由はない。おまけに敵もいない。本など読む気のないショウジョウバエにとって、暗黒など大して困ることはないのである。ネズミの尻尾を切る実験と大差はない、といったら言いすぎだろうが。

一方、ショウジョウバエにキナ粉——アベ川モチにつける、あのキナ粉である——を食べさせて、いとも簡単に、ショウジョウバエの目をなくしてしまった先生もいる。私と合ったときその先生は、「ショウジョウバエの目をなくすくらい、簡単やでエ」と、変な気炎を上げておられた。「キナ粉のどんな成分がどのように働いて、目がなくなったのかは、調べてみたらわかりますやろけど、先生が、ショウジョウバエにキナ粉を食わせようと思いはったことは、近代科学の手に負えまへんやろな」

というわけで、獲得形質は遺伝しないことに、現在はなっている。未来のことは、たいていわからない。21世紀にはまた、獲得形質が遺伝することが実証されて、20世紀の学者はなぜこんな馬鹿げたことを言っていたのだらうということに、なっているかもしれない。だから、20世紀の成果をもとにして、19世紀初めのラマルクの間違いを責めるといのは、それこそ馬鹿気ているのである。かのダーウィンですら、獲得形質の遺伝を信じていた。アインシュタインの相対性原理が正しいからといって、ニュートンが馬鹿だということにはならないだろう。もっとも、ニュートンという人も少々変っていて、たとえば天体の運行をかのニュートン力学であますところなく説明したのだが、その天体がどうして動き出したのかは、ニュートン力学からは出てこなかった。そこで彼は神様を持ち出して、はじめに神様がゲバ棒か何かで天体をどついて動かしたことにした。有名な「最初の一撃」というやつである。また、ニュートン力学にしたがった、整然たる天体の運行は、神様をなぐさめるための音楽である、などと、その主著「プリンキピア」の中で書いている、そうである。「物理学の先生は、ニュートンのそういう面を、いままで大学で教えてこなかった。近代科学の父がそんな神がかりでは、教育上よろしくない、と考えたのでしょうね」と、もう相当以前の、したがって私の記憶も正確でない、ただし、そういったことはまちがいない、確か「週刊朝日」の対談の中で、湯川秀樹大先生が言われていた。ニュートンはそのほかにも、神霊術のようなものこってみたり、徴税請負人をやって金もうけしたり、“学者”にあるべからざることをいろいろとしている。断わっておくが、私はニュートンを非難しているのではない。そんなことで学者を非難したりすると、私が学者でおれなくなる。ニュートンは、だから、面白い人だと、高く評価しているのである。そういえば、近代化学の父、ラウオアジエも、徴税請負人をやっていた。この人はしかし、気の毒にも、フランス革命のときにそれがたたって、ギロチンで首を切り落とされ

てしまった。首を切られるのは御免だが、とにかくいろいろな学者がいて面白い。血液循環の原理を発見して近代生理学の父とあがめられているハーウエイだって、イギリスの何とかいう王様の侍医で、当時ヨーロッパをふき荒れていた「魔女狩り」旋風の中で、つかまった女を調べて魔女か魔女でないかを判定していたというのだから、あまり信用しない方がよい。

その信用できない学者の中で、このラマルクという人は、至って真面目な、大変な努力家であった。キュウイエとは別の意味で、私にとってあまり好ましがらざる人物なのだが、ラマルク抜きに系統分類学など、コーヒーをいれないクリーブのようなもので、もっともこの間、そうして飲んでいる学生を見て仰天したことがあったが、まあふつうはあまりいただけない。ここらでそろそろ本題に入り、ラマルクについて語ることにしよう。

ラマルクは1744年生まれだから、1769年生まれのキュウイエよりも、25歳も年長であった。私と思子とが26年ちがいだから、ちょうど親子みたいなものである。子供のキュウイエにいじめたおされたのだから、ラマルクの恨みの深さもよく判るといえるものである。すでに書いたように、キュウイエは20歳ごろにフランス革命に出会い、「石のひとつも投げた」のだが、ラマルクはその時すでに40台のなかば、中年の花盛りである。ところがこの中年、どういふわけか革命に感激・共感して、まさか石は投げなかつただろうが、大いに革命政府に協力したらしい。その上、ナポレオンの反革命が成功したのちも、いち早く尻尾をふったキュウイエと反対に、死ぬまで革命の初心を忘れなかつたらしい。これだから、中年からの浮気は恐いのである。

革命が成功し、国民公会が権力をにぎったとき、それまで王様の持ち物であった王立植物園を拡充改組して、自然史博物館として新しく出発させることになり、キュウイエやサンチレルとともに、我がラマルクも、その「教授」として就任する。もっとも、ラマルクははじめからついてなくて、実はこれまでもついてなかつたのだが、彼がそれまでやっていた植物学の講座はすでに埋まっていた、空いていたのは、リンネ以来ややこしくて手のつけようのない、したがってだれもやりたがらなかつた無せきつゝ動物学の講座だけであつた。もっとも、動物界をせきつゝ動物と無せきつゝ動物との2つに分けたのは当のラマルクだから、就任のときはまだアリストテレスの無血動物なんて名前が使われていたのかもしれない。ただし、いつものとおり責任は持たない。

もともと学者というものは、年齢をとるにつれて次第に専門分化していくものである。最近ではその傾向が強まり、若いうちから極度に専門化してしまう。私も学生のときに海に潜って魚の観察をはじめ、ほんの2〜3年で日本における「磯魚の権威」に成り上つた。ほかにそんなヒマなことをやっている人がいなかつたからである。それから20年、魚ひと筋にやってきた（本当かね）私が、よわい40を越えてからカエルの研究にかわつた。同じ生態学の中で、それこそちょっと「上陸」しただけなのだが、中年にいたって研究対象を変えるというのは、実に大変なことなのである。その上、ラマルクの場合は自分の意志で変えたのではない。だれかに変えさせられたのである。

それがキュウイエのさしがねだ、という説もあるが、わずか20歳のキュウイエに、まだそんな力はなかなかなかっただろう。まずたいていの人なら、「この年齢になってわけもわからぬムシなんていじれるかい、勝手にしやがれ」とふてくされるところだが、ラマルクはその点、人間の出来がちがっていたらしい。彼はいやな顔ひとつ見せず、というのは見たわけではないから少々怪しいが、ラマルクだって人間だから、1人になったときなど、「キュウイエの馬鹿野郎、オタンコナス！」などつぶやいていたかも知れないが、何分そのころには「生物学会誌」がなかったものだから、そういう“生の声”は記録にない。とにかく彼は、博物館の中に整理もされずにたまっていたムシけらどもを、たんねんに洗い出し、こつこつと調べはじめたのである。そしてそれから、10年もたっていない1801年、無せきつい動物すべてをもうらし、体系づけた大著、「無せきつい動物モノグラフ」書き上げたのである。こういう人がいるから困ってしまうのだ。

実は、ラマルクのおかげで大いに迷惑したことがもう1つある。今を去る8年前、私が神戸市の水族館で、仕事がないのに給料をくれるといういとも優雅な職場を捨てて、はるばる金沢までやってきたときの話である。当時、金沢大学理学部生物学科では、教官の“権威”が地に落ちていて、その代わり大学院会が幅をきかせていて、教室会議を毎回傍聴におしかけてくる。それだけならいいが、ちょっとでも変なことを決めようものなら、それはどういうわけか、と質問する。それなら変なことを決めなければよいのだが、そこは大学の学者であって、まともなことが決められるはずはない。院生の質問に答えるためにまた教室会議を開く。すると、その回答が決まる前に、さらに変な発言が出たりして、また院生の質問がくる。こういうわけで、週1回の教室会議では足りず、たいてい2回、ときには3回も開かれた。水族館での優雅な生活と大ちがいである。その上、会議をさぼるわけにもいかぬ。何となれば、教官である私よりもずっと古くからいる院生、ときには何と10年間も大学にいるという猛者(もさ)もいて、これは教官としては何とも扱いに困る代物なのである。何しろ西も東も分らぬ新米の教官を、いとも親切に、あれこれと指導してくれるからである。この指導学生は、私がよんどころない事情で、たまに教室会議を欠席すると、こんなことを言う。「先生、ラマルクは自然史博物館の教授になってから退職するまでの25年間に、教授会を休んだのはたった3回だったそうですよ。先生はもう2回さぼったから、停年まで(ちょうど25年あった)あと1回しか欠席できませんよ」あとで気がついたら、25年間にいったい何回教授会があったのかを彼は言わなかった。3回だったかも知れないではないか!

もっとも、あまりの院生のしつこさに業(ごう)を煮やした教授たちは、権力をふるって教室会議を解散してしまったから、私の欠席は2回にとどまっている。当分教室会議が再開される見通しはないから、どうやらラマルクの記録を破れそうである。破ってもだれも賞めてくれそうにはないが。ちなみに言うと、私は当時、助教授だったから、教室会議の権力的解散をやった方ではなく、された方である。いまま助教授で、これからも教授にはなれない。先日、環境庁公害研究所によぼれたとき、何を感違(あやま)いしたのか私を教授だと思ったらしく、公文書にこう書いてあった。「奥野良

之助教授」

またもや話が放散して行って、当時の生物学科みたいに拾収がつかなくなってきた。教授ならこの当りで権力的解散といくところだが、残念なことに私は助教授だからそんな権限はない。何とか拾収してラマルクの話をつづけることにしよう。といっても別にむずかしいことではない。「もともとどって」という接続詞ひとつで片がつく。

もともとどって、ラマルクは、さらに8年の後の1809年、かの高名なる名著、「動物哲学」を公刊する。ダーウィンなら全集まで出ているし、「種の起原」にいたっては翻訳が3～4種類も出ているのに、このラマルクの本は、私の知る限り、という言葉は実は大変便利で、これさえ書いておくと事実と相異してもしかられない、もっとも、人間だれしも、知ってることしか知らないのだから、この文句は本当は書いても書かなくても、同じことなのである。私が昔、水族館にいたとき、「呼び出し」というのがあった。「何の何兵衛さん、いらっしやいましたら、正面玄関までおこし下さい」という、あれである。それを聞く度に私は「いらっしやいましたら」というのが気になって、いらいらした。いらっしやるから聞こえるので、もともといらっしやらなかったら、呼び出しそのものが聞こえない。こんなむだな言葉はないではないか。ある日私は動員されて、呼び出しをやらされたことがある。チャンス、とばかり、私はそれをはぶいて呼び出してしてみた。不思議なことに、これがうまくいかない。何か、お客さんをしっかりつけている感じになってしまうのである。論理的には無意味な文句でも、実際的には役に立っているものだ、ということを知った。もともとこれは、私の話が長いということの言い訳ではない。とにかく先を急ぐことにしよう。

私の知る限り、ラマルクの著書は、「動物哲学」ただひとつしか訳されていない。それも、昭和の初期に単行本として出版され、後に岩波文庫にはいったが、戦後はずっと絶版になったままであり、古本としても容易に手に入らない、といった状態である。その訳は、小泉丹・山田吉彦両氏の共訳になっているが、どうやら山田氏こと、きだみのる氏がほとんど訳したらしい。したがって、格調高い名文である。それはよいのだが、なにぶん昭和初期のことだから、旧カナ旧漢字、戦後教育を受けた人の手に負える代物ではない。数年前に数人の学生さんと論議をやったことがあるが、そのときの私の役目は、漢字の読み係であった。ついでに言うと、キュウイエの本も仲良く1冊も訳されていない。フランス熱の娘を当てにした私の大計画には、これらの著書の翻訳ももちろんはいていたのだが、すでに書いた通り、計画はすでにサセツしている。だれか訳して投稿してくれないかな。

(会長、会長！ — なんや、うるさいな — もうないんですよ — 何がないねん — ページ数がオーバーしそなんですよ — ケチケチいうな — そんなこといったって、送料が1冊140円でいけなくなりますよ — そら大変や。この辺でうち切るか)

(以下 次号)

## 広 告 の ペ ジ

※ 「無農薬」とは言いすぎて、「低農薬」の“甘夏カン”を食べませんか！

日本の公害の原点、水俣病の患者の人たちといっしょに、その生活や裁判闘争を助けている、「水俣病センター相思社」というところがあります。そこへ、我が学会の会員が1人行っておひまして、このほど、応援を求めてきました。

患者の農家の方が、自分達の体験から、できるだけ農薬を使わずにつくっている、甘夏カンが今年は昨年の倍もとれて、売れのこる危険がある、ということです。そこで、産地直送の販路を広げたいと、先ごろ本部をおとづれてきました。

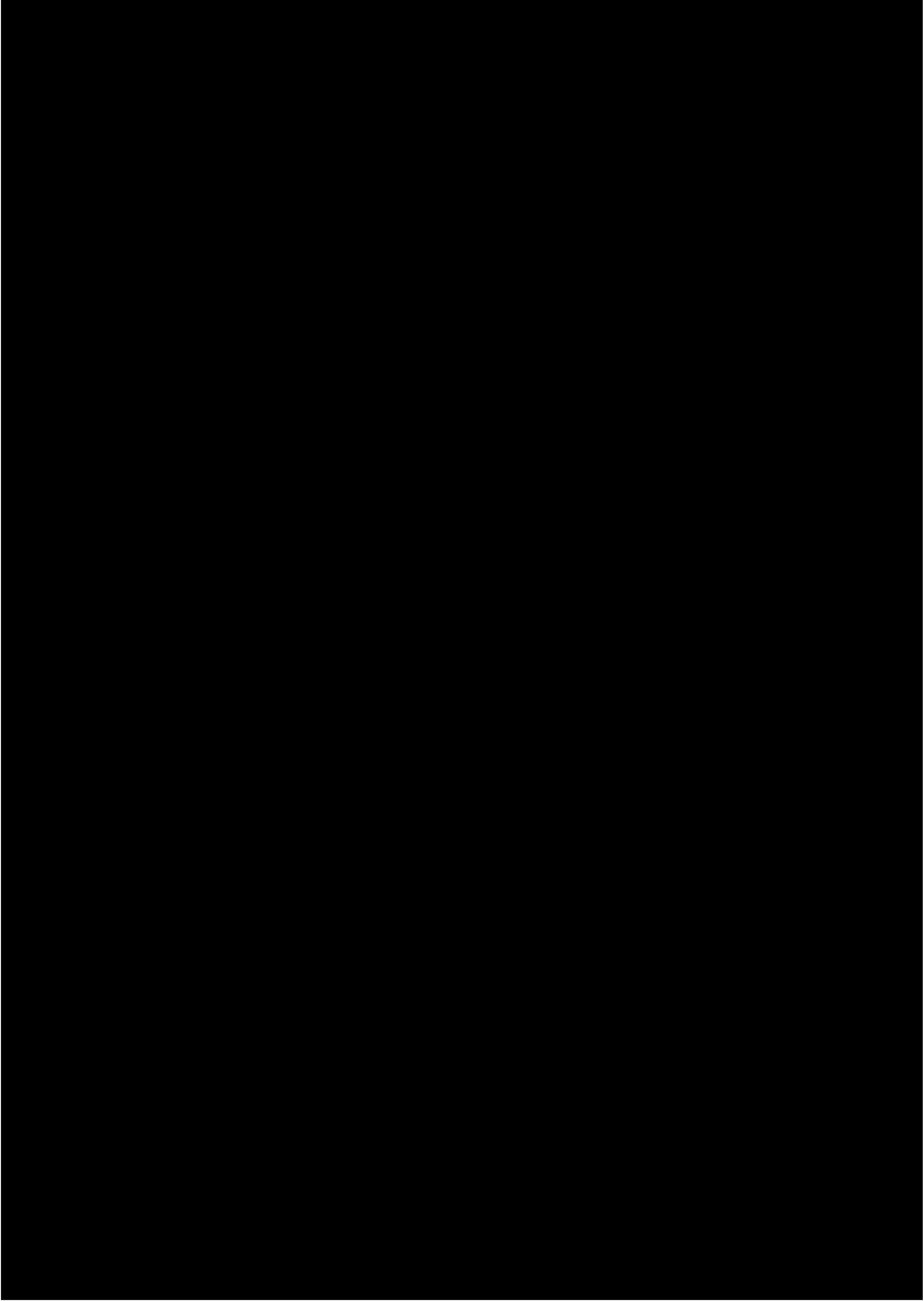
といっても、何分遠いところですから、少量では採算がとれず、最低30ケース（1ケース15kg約50個）まとめなければなりません。本部（金沢）ではなんとかまとまり、発注しましたが、会員の方々の中で、ひとつまとめて購入してやろうと思われる方は、直接現地へ照会してみてください。まあ、生物（これはナマモノと読みます）のことですから時期があって（3月中くらい）、今年は無理だと思いますが、来年以降もつづきますので、もし気のある方は、お気にかけておいて下されば幸いです。

どうせお互い、あんまり良くないことばかりしているんですから、ときには良い事もいたしましょう。“1日1善!!”

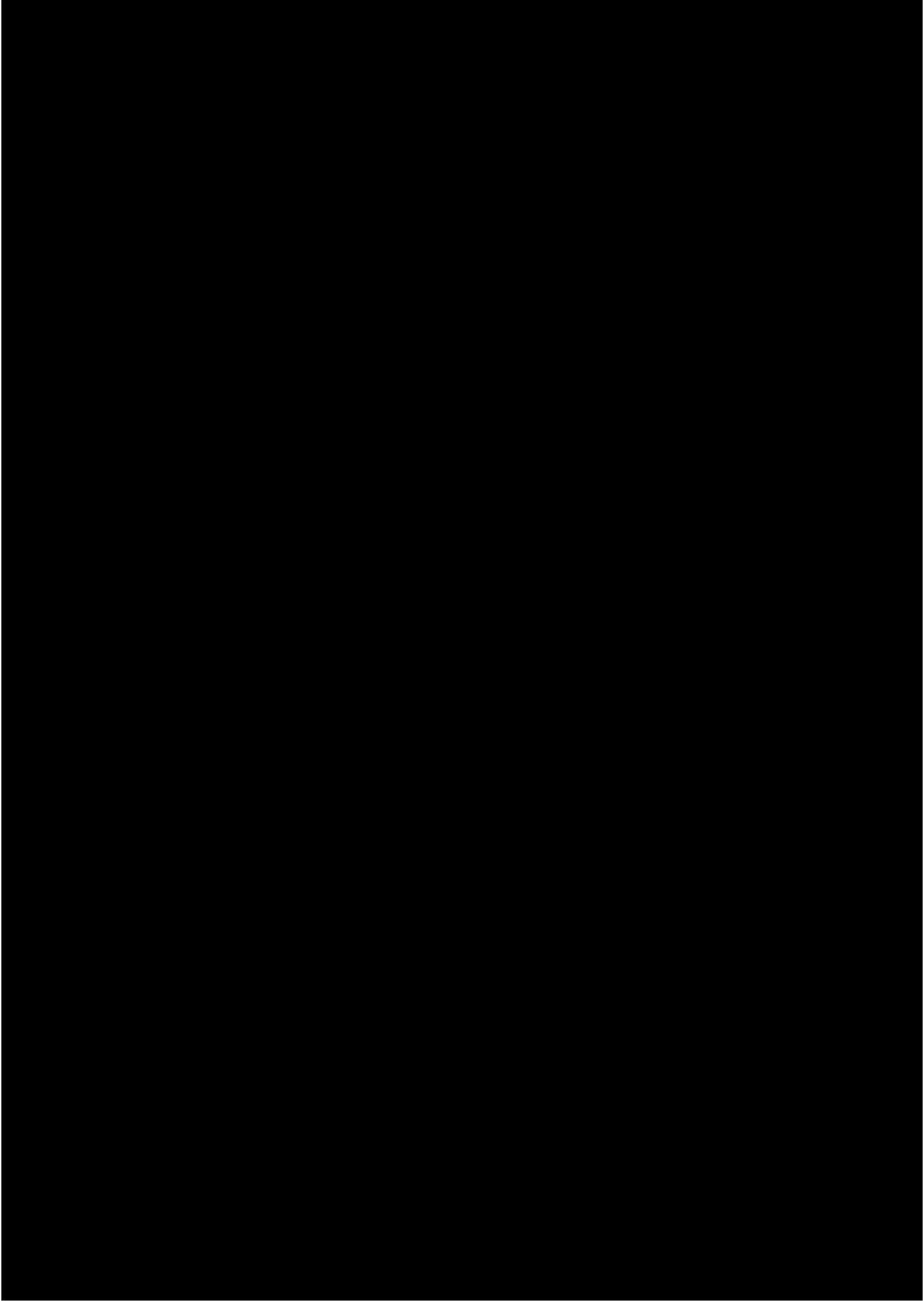
もらった資料を無断転載しておきますので、参考にして下さい。

(奥野良之助)

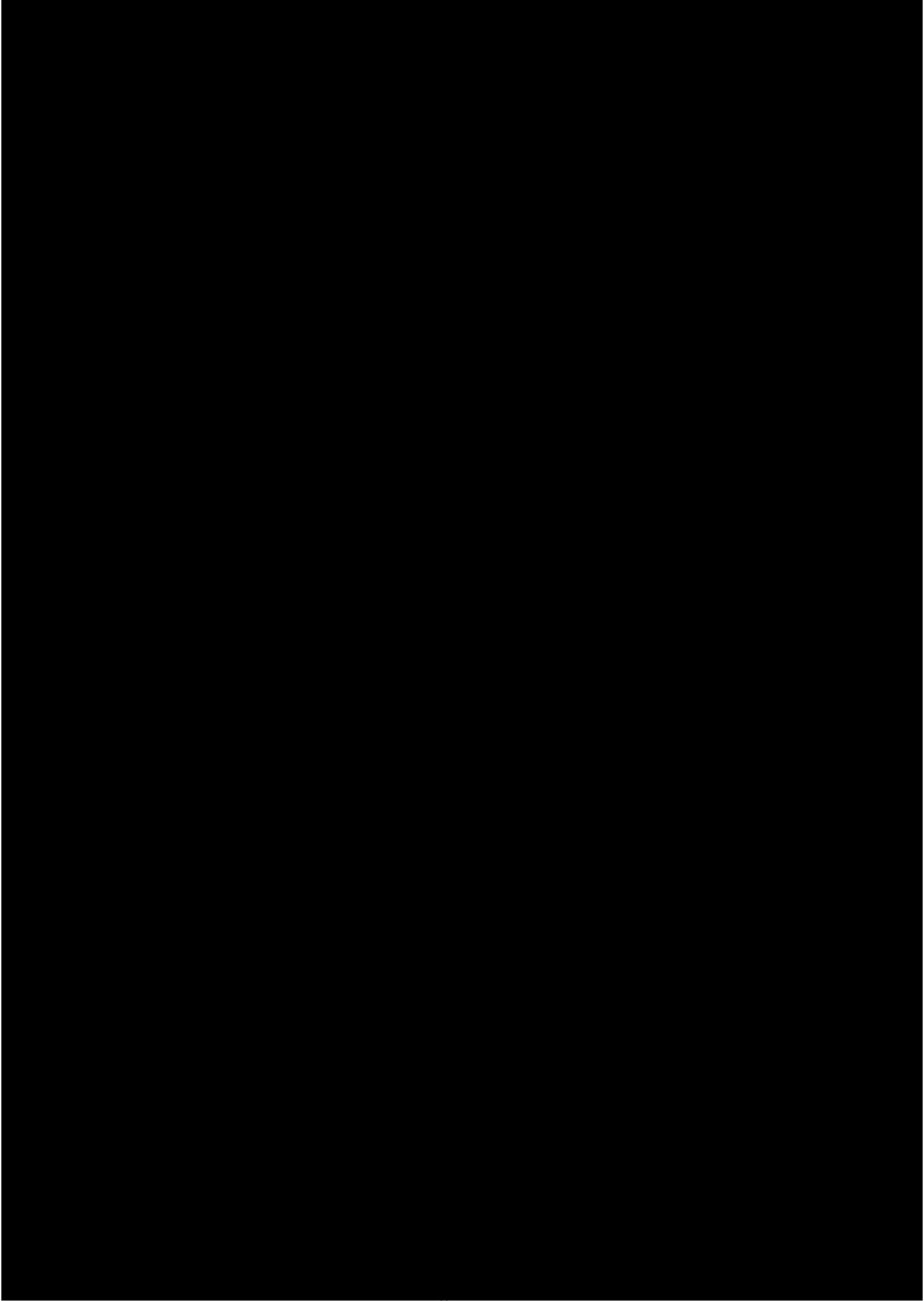


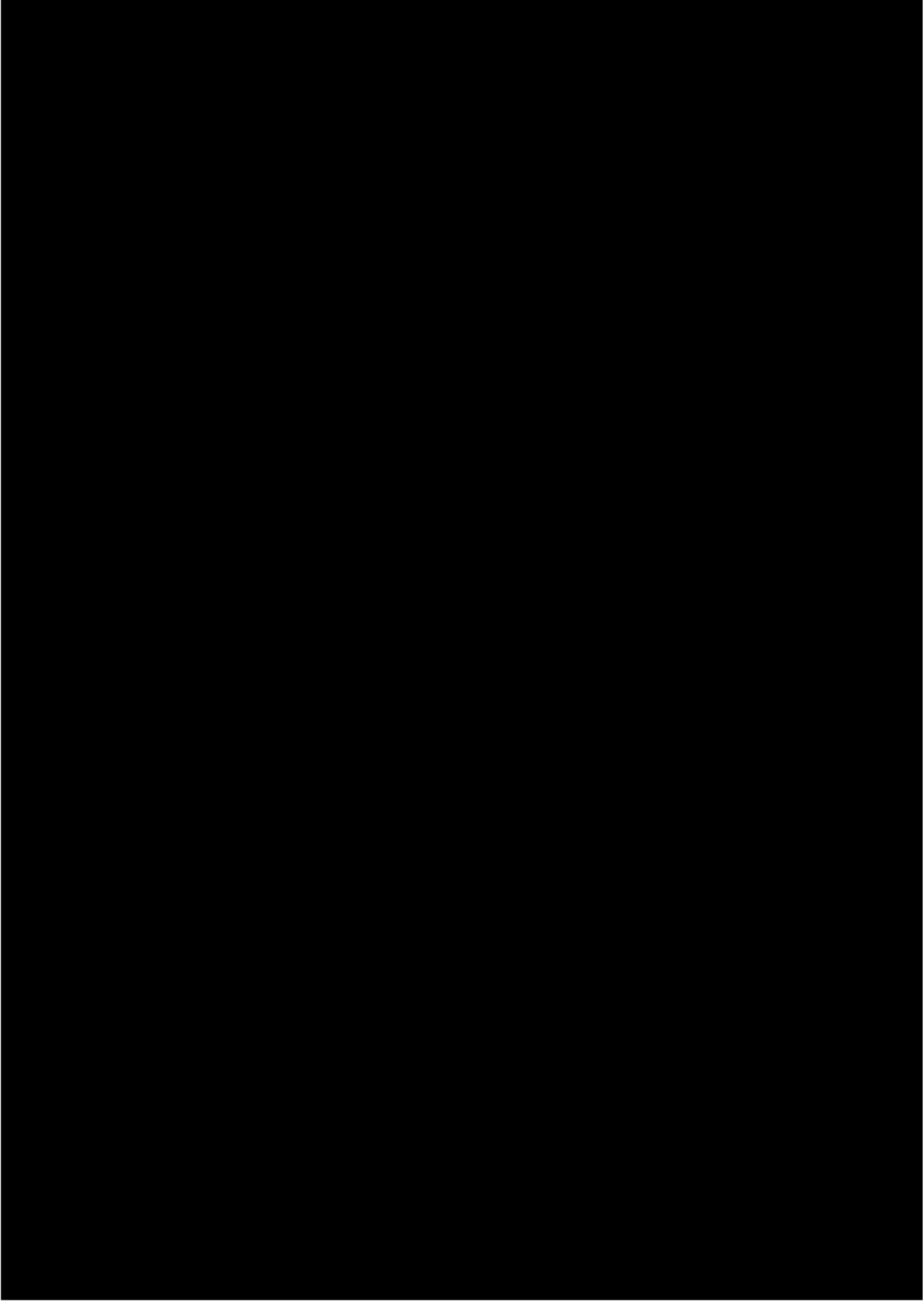


















<< 編 集 局 だ よ り >>

例によって、ある日の編集局の会話から。

局長：会長、この間某教授から、大学院を教える研究科委員の資格がない、っていわれたんだそうですね。

会長：君も耳が早いな、どこからきいた？

局長：会長が言いふらしてまわってるから、みんな知ってますよ。

会長：そやったかな。あれは、まあ、本当の話や。

局長：会長だって天下の助教授、頭に来ないんですか。何で言い返してやらないんです。

会長：言い返すのは人の3倍くらいやったけどな、頭には来やへんな。大体、院生を教育する資格なんて、ほんまはないもん。

局長：そんな無茶な！ 無責任ですよ、そんなの。

会長：そうかな。ほんまはないのに、あるいう方が無責任どっちゃうか。考えて見。人を教育するなんて、恐いことやで。

局長：そういうたら、そらそうでしょうけど、それで給料もらってるんだから、やっぱりやらんならんでしょう。

会長：そやから、やってるがな。講義もしてるし、実習もな。内味はあんまり、のぞいてほしくないけどな。とても人様にお見せできるようなものではないからな。

局長：そんなこというたって、学生はきいてるでしょう。お見せしてるやないですか。

会長：しょうがないもんな。学生に内緒で講義するわけにいかんしな。大学の先生の唯一の欠点は講義せんらんということや。

局長：……？

またしても局長は、会長にごまかされてしまったようです。まあ、相手は大学の先生、それが商売だから、無理ありませんね。

(編 集 子)

日本生物学会誌 第8号 1980年2月20日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載